

パブリックヘルスと“なまめかし”の感覚

鶴本 明久

Public Health and the Sense of ‘NAMAMEKASHI’

Akihisa Tsurumoto

編集長には悪いのですが、こうして年に一度下手な文章で随筆のようなことを好きに書かせていただけることが楽しみになっています。とはいえ、この雑誌は科学ジャーナルですから、そろそろ最後にしようかと思っています。

2010年1月17日に「浅川マキ (67歳)」の訃報が流されました。今では知らない人の方が多いでしょうが、団塊から私たちの世代の間に多くのファンを持っていて、いろいろな意味において一世を風靡した歌手なのです。頹廢的との評価もありましたが、シンガーソングライターとして1970年前後のアングラフィック界の旗手の一人でした。私も何度かライブにも行きました。「頹廢的」という言葉も死語に近くなっているかもしれませんが、浅川マキは頹廢的どころかヘビースモーカーということ以外ではとても健康的な歌手だったと思います。ただ、おそろしくシャイなアーティストでした。徒然草の第一段に「人間としてこの世に生まれてきた以上、――<中略>――いちばん願わしいことはなまめかしくあることだ(森本哲郎訳)」とあります。「なまめかし」の意味は現在とはかなり異なっていて、「奥ゆかしさ」

や「上品な美しさ」といった「抑制された美しさ」を表現していたようです。浅川マキの歌は、「なまめかしい」という表現がびったりなのですが、違った感覚では現在の「なまめかしさ」も持っていたのかもしれませんが。古き良き時代を懐かしむのは世の常ですが、「昭和ブーム」や「農業ブーム」は単なる郷愁ではなく徒然草で表現された「なまめかしさ」のような美意識への回帰のような気がします。わが国の公衆衛生に必要な要素の1つとして「なまめかしさ」の感覚があると思いますが、この感性が失われているということも憂慮の一つだと感じています。

疾病構造の変化から保健医療モデルが「医療モデル」から「生活モデル」へとシフトしなければならないと言われて久しいのですが、いまだに「医療中心」の体制がつづいているように思えてなりません。健康づくりの主体は「生活者(住民)」で、保健医療の専門家はサポーターの役割というのが前提のはずです。なかなかシフトできない理由に、保健医療の供給側に「なまめかしさ」の感覚が欠如しているというのがありますか。まだ、医療を経験主義で行っていた時代の方がこの感覚は強かったのではないのでしょうか。なぜ失われていったかという保健医療を過度にビジネスモデルにのせたことが大きな原因であるように思います。一見、合理的で社会科学的手法を使うので、有効性や欠点などもクリアかつ短期間で評価できるので受け入れやすいのでしょうか。しかし、教育

【著者連絡先】

〒230-8501 神奈川県横浜市鶴見区鶴見2-1-3

鶴見大学歯学部予防歯科学講座

鶴本明久

E-mail : tsurumoto-a@tsurumi-u.ac.jp

と保健医療にビジネスの考え方を適用することは大変危険なことですし、本来不可能なことなのです。教育も保健医療もたくさんの不確定要素の影響を受けるので、継続性が重要であるとともに多くの無駄を覚悟しなければなりません。ビジネスのように、うまくいかないから中止して新しいシステムに乗り換えようとはいきません。無理にビジネスモデルを進めようとすると様々の矛盾は「傲慢」へと変化します。科学的に効果と安全性が証明され極めて合理的な予防手段であるフロリデーションが多くの国で実現しているにもかかわらず、わが国での実現が困難なのはその一例かもしれません。文化の多様性は「なまめかし」の価値感の相違をもたらします。わが国の保健医療のステークホルダーには「なまめかしさ」の感覚が重要なのです。浅川マキや井上陽水は良い保健医療者になっていたかもしれません。ヘビースモーカーというのが大きな欠点です。しかし具体的にお前は どうする というのが問題になります。

我々の世代では、浅川マキといえれば次に寺山修二が出てくるのですが、私自身は彼の本も戯曲も触れたことはありません。しかし、寺山修二の代表作「書を捨てよ、町へ出よう」というタイトル

がすぐに頭に浮かびます。単刀直入なこのタイトルはいろいろな意味に解釈することができますが、直訳的には「もっとリアリズムの中で生きよ！」ということでしょうか。このタイトルは、最近の私自身のスローガンにもなっています。仕事も含めてあまりにバーチャルな中で生活しているからかもしれません。たとえば「食育」という言葉にしてもリアリティがないから作り出されたのではないのでしょうか。アフリカなどの発展途上国で必要とされる言葉とはとても思えません。わが国では必要なのかもしれませんが、もしかしたらもっと重要な健康問題のニーズを見逃している可能性があります。リアリティはフィールドの中にしかありません。我々は普遍的と思っている理論や言葉でコミュニケーションをとっていますが、リアリティは平気で裏切ります。可能性は保障できませんが、フィールドからのメッセージによって常に理論や言葉を修正する態度が重要だと思っています。パブリックヘルスの原点とも言えますが、特にわが国で必要な帰結がパブリックヘルスの持つ「なまめかしさ」かもしれません。「なまめかしさ」を獲得するための訓練として「町へ出よう」と思いますが、「書を捨てる」ことは結構難しいことかもしれません。

Public Health and the Sense of ‘NAMAMEKASHI’

Akihisa Tsurumoto

(Tsurumi University, School of Dental Medicine, Department of Preventive Dentistry and Public Health)

The word of “NAMAMEKASHI” is the language which comes out in Japanese classical literature, and expresses “the controlled beauty.” It is a peculiar sense of beauty which Japanese people believe to be important, and it is simple moderate beauty although it is not colorful. It may be necessary to control business economical efficiency and rationality in the public health through “Health model based on life”. That is because the residents are the leads. Although there is not a clear standard in that case, the essential sense is “NAMAMEKASHI” in Japan. The public health that is appreciated strongly by the sense of “NAMAMEKASHI” is ideal.

Health Science and Health Care 9 (2) : 109 – 110, 2009